

雨天日放課後(2013年梅雨期・2016年)の集団規模と使われ方の関係

- 規模計画の観点から見た2室3領域型学童保育施設つばめの家の使われ方その2 -

学童保育施設	納屋	改修
地域塾	使われ方	空間機能評価

正会員	○ 神崎翔太郎*
正会員	中村京平**
正会員	三島幸子***
正会員	中園真人****

1. 初めに

晴天日放課後(2011年秋・2016年)の集団規模と使われ方の関係、規模計画の観点から見た2室3領域型学童保育施設の使われ方その1に続き、雨天日放課後(2013年梅雨期・2016年)の報告を行う。

2. 調査概要と雨天日放課後の基本生活プログラム

調査期間は2013.06.10-07.16の内8日、2016.06.06-2016.07.12の内20日間である。施設利用児童と職員を対象とし、施設の開錠から施錠まで10分間隔で平面図に行方の場と内容を記録した。併せて多目的室とプレイルームにビデオカメラを各1台設置し、1日の生活場面を全期間撮影するとともに、適宜写真撮影を行い、使われ方調査を行った。

本稿では、各期の調査日から平均来所人数15人である2013年梅雨期、施設定員を上回る28人が来所した2016年の調査期間内より24~25・28人の2つの集団規模を抽出し、その典型的な場面を図面で示し、考察を加える。

雨天日放課後の基本プログラムは、15:00過ぎに学校から徒歩で来所する。来所した児童からおやつを食べて、勉強を開始する。15:50頃になると勉強を終えた児童が現れ始め、勉強を終えた児童から自由遊びに移行する。児童は室内・軒下で遊び、晴天日の屋外遊びに比べ雨天日の軒下遊びは広いスペースを有していないため、大半の児童が室内で遊ぶ。17:00になると軒下遊びが制限され、児童は室内で静的遊びを行い保護者の迎えを待つ。保護者は17:00以降に迎えにやってくるのが大半で、児童が全員帰宅するのは、18:00前後となる。児童が全員帰宅すると、施設を施錠し閉所となる。

3. 生活プログラムと典型事例

図3, 4には、各期間中の典型事例の図面を示したものであり、生活プログラムの展開に沿って使われ方の詳細を考察していく。児童はそれぞれの下校時間により来所時間は異なり、2013・2016年の両方の年で概ね、15:10~15:40の間に来所する。3年生は授業数の違いから、曜日により16:00~17:00に来所する場合もある。児童は来所すると、荷物を自分の棚に置き、手を洗っておやつを食べる。2013年梅雨期では、平均来所人数が15人であり、余裕があるため多目的室・プレイルームそれぞれに空間的な役割を持たせることが可能であり、プレイルームでおやつを食べ、多目的室で勉強をさせる。おやつのための机はプレイルームに横並びに2つ配置されており、児童が一斉に来所するか、別々に来所するかによりおや

つの際の机を占める人数も日によって異なり、人数が多い場合には机を囲むようにして座る。おやつを食べ終わった児童から多目的室に移動し勉強を行う(図1-a)。机は多目的に主に6つ配置されており、児童は基本的にひとつの机に2人の児童が座り勉強を行う。児童が全員おやつを食べ終わると、職員はプレイルームの机を片付ける。勉強を終えた児童は、プレイルームで自由遊びを開始し、プレイルームでは静的・動的遊びが両方向われる。動的遊びはプレイルームの中央で行われ、静的遊びはプレイルームの端の方や畳コーナーで行われる(図1-b, c)。多目的では勉強が行われ、プレイルームでは主に動的遊び、畳コーナーでは静的遊びと2室3領域の空間構成をうまく利用したそれぞれの領域区分ができており、円滑にプログラムが進行できている。2016年は、晴天日と同様に人数が増加したため常に2部屋を利用しプログラムが行われるようになる。児童も学年により来所時間が異なるため、それぞれの勉強の終了時間にも差が生じる。そのため、勉強を早く終える児童の遊ぶ空間を確保するために畳コーナーを含む2領域があるプレイルームから児童を座らせる。24~25人では、児童の来所前に職員が予めおやつ・勉強で利用する机の準備をしておき、その日の来所予定人数により机を配置し、できるだけ多目的に多く机を配置する(図1-d)。15:10~15:40頃になると大半の児童が来所する。来所した学年順にプレイルームから座らせ、おやつを各自の机で食べた後に同じ机で勉強を始める(図1-e)。職員は基本的に多目的室、プレイルームに1人ずつと多目的室・プレイルーム間に1人配置し、児童の指導を行う。15:40を過ぎると早く来所した児童の勉強が終了しだす。プレイルームの机は児童が勉強を終了した机から職員が片付け、自由遊びの場とできるようにする。プレイルームでまだ児童が勉強を行っている間は畳コーナーでの静的遊びや読書を児童は行い、プレイルームで勉強をする児童がいなくなると机が片付けられ、完全に動的遊びの場として開放される。その際は、プレイルームでの自由遊びが多目的室で勉強する児童の妨げにならないように、職員が1人多目的室・プレイルーム間に立ち、注意を払いながら見守る(図1-f)。施設定員を上回る28人が来所する場合は、同様に来所前におやつ・机の準備がされるが、できるだけプレイルームの机を増やさずに多目的室に机の数を増やす。2部屋を同時に利用しているため、同様に来所した学年順にプレ



図1 2013年梅雨期・2016年放課後使われ方の典型場面(その1)

イルームから座らせ、児童はおやつ・勉強の順で行う(図1-g)。16:00 前後になるとプレイルームで勉強を行っていた児童の勉強を終了し始め、自由遊びが始まります。同様に、完全にプレイルームが空くまでは畳コーナーでの静的遊びや読書のみが行われ、職員の見守りの下で行われ、職員は遊んでいる児童と勉強している児童の間に必ず1人配置して見守る(図1-h)。このように人数の増加に対して、その後のプログラムのための逃げ場を作り、決まり事を設定するような、児童のプログラム間の移動を円滑にかつプログラムの混同を避けるようにする工夫や、学年毎にすることで複数人に同指導を行えるようにする職員の作業の合理化、2室3領域の空間構成をうまく利用した領域区分を行う場面が見られる。

勉強後は自由遊びが行われる。2013年は16:00頃ではまだ勉強が行われており、高学年は日により遅れて来所することがあり、来所するとプレイルームでは自由遊びが行われているため、多目的室でおやつを食べ、勉強を行う。プレイルームでの動的遊びが激しい場合などには、多目的室・プレイルーム間に椅子を使ってバリケードのようにする場面も見られた。多目的室で勉強する児童がいなくなると静的遊びの場として開放され、多目的室・プレイルームを静的・動的遊びと領域を分けて利用する(図2-a, b)。プレイルームでは、ボール遊びや追いかけっ

こが行われ、多目的室での静的遊びではパソコンを使いゲームをする児童も見られた(図2-c)。2013年では人数が多くないので、室内で遊ぶ児童が多いが軒下で遊ぶ児童も見られた。2016年では、晴天日とは異なり屋外遊びができないので、室内で遊ぶ児童が大半となる。すると施設定員を上回る日などでは人数の超過によりスペースが足りなくなると軒下で遊ぶ児童が多く見られた。2016年の24~25人では、軒下で遊ぶ児童が数人見られるものの、施設定員同様の人数でありプレイルームで動的遊びを行う児童が多く見られる場合などには、十分なスペースが得られない場面も見られた。プレイルームでは、動的遊びの中で最も広いスペースを有する車のカートや追いかけっこ、ごっこ遊びなどが見られ、スペースが十分に得られない場合などには、ごっこ遊びでは畳コーナーとのレベル差を利用した使われ方が行われる場面も見られた(図2-d)。プレイルームでの遊びが激しい場合には、職員が多目的室とプレイルームの間に立ち、動的遊びが多目的室での静的遊びに混同しないように注意しながら見守る場面も見られた(図2-e、写真2-1)。24~25人ではプレイルームでは、2~3のグループ数で動的遊びが行われ、静的遊びも多目的室・畳コーナーに分かれ3グループ数ぐらいで構成されそれぞれの遊びがお互いに干渉される場面はあまり見られることなく動的遊びは行われて

<室内遊び(～17:00)>		凡例) 児童: 職員:	
2013年梅雨期 15人	a (2013.07.04 16:25)	b (2013.07.04 16:40)	c (2013.06.19 16:35)
	16:20～17:00 高学年は日によって遅れて来所する事があり、来所すると多目的室の机でおやつを食べ、その後勉強を行う。プレイルームでの遊びが激しい場合は多目的室とプレイルームの間に椅子を使ってバリアードにするシーンも見られ、多目的室で勉強をしている児童が減ると静的遊びが広いスペースを使用するシーンも見られた。		多目的室でPCを使ったゲームをする様子も見られた。
	2016年 24～25人	d (2016.07.12 16:30)	e (2016.06.20 16:45)
16:20～16:40 動的遊びの範囲が広い時にごっこ遊びなどは畳のスペースのレベル差をうまく使いながら行われる。		16:30～16:50 プレイルームでの遊びが激しい場合は職員が多目的室とプレイルームの間に立ち、動的と静的遊びが混入しないようにする。	
2016年 28人	f (2016.07.08 16:30)	写真1	g (2016.06.27 16:25)
	16:00～16:50 遊ぶスペースが狭くなると遊びの種類を変え、それにつられて遊びを変える児童が表れ、グループ数が増加する。軒下や畳スペースに移動し、うまく遊んでいる。		
2016年 28人	h (2016.07.01 16:30)	写真3	i (2013.07.04 17:15)
	室内で遊べるスペースが足りない児童が軒下でぶらんこやままごと、ごっこ遊びなどをする。		
2013年梅雨期 15人	j (2016.06.27 17:10)		2016年 28人
	17:00～17時以降は迎えが来るまで多目的室で静的遊び主にテレビを見て待つ。読書や折り紙をする児童もいる。職員はプレイルームと水回りの掃除と事務作業に分かれて作業。		

図2 2013年梅雨期・2016年放課後使われ方の典型場面(その2)

いた。2016年の28人では24～25人に比べ軒下で遊ぶ児童数は多く見られるが、室内で遊ぶ児童数は瞬間的には多い場面が存在し、プレイルームに人数が多く集まると、動的遊び間にも接触や干渉が発生する場面が見られるようになる。遊ぶスペースがなくなり干渉する場面が見られるようになると、遊びの種類を変え、つられてさらに遊びの種類を変える児童が現れる。そうすることで室内に存在するグループ数が多くなり、ひとつの遊びの継続時間も短くなる。遊びの種類を変える児童は、軒下や畳コーナーに移動し遊ぶ場面も多く見られる(図2-f)。グループ数においてはプレイルームでの動的遊びのグループ数が3グループより多くなると遊び間の接触が見られた(図2-g、写真2-2)。

軒下遊びは2013・2016年も同様に行われ、施設玄関前

の靴箱のあるスペースでのおままごとや軒下スペースの一番端の場所にあるブランコで遊ぶ場面が多く見られた(図2-h、写真2-3)。雨天日における自由遊びでは、基本的に室内で遊びが行われるため、晴天日に比べ人数増加の影響を受ける。2013年においては施設定員以下であり、多目的室・プレイルームで遊びの領域区別を行い、静的・動的が混同することなく行っている。2016年では、24～25人においては施設定員の人数であり、プレイルームでの動的遊びはレベル差をうまく利用する場面やグループ間での干渉があまり発生することなく自由遊びが行っていた。しかし、施設定員を上回る28人では、グループ数が24～25人に比べ多く発生し、動的遊び間では干渉が多くみられ、遊びを変える児童が多く見られた。軒下での遊びが逃げの場として機能しているが、動きが生じ

るため、28人では自由遊び特に動的遊びは限界と考えることができる。

17:00になると、児童は室内に戻り、保護者の迎えを待つ時間となる。2013年では、17:00以降であっても児童は自由に遊びを行い、基本的には多目的室・プレイルームで静的・動的遊びと区別して遊びが行われる。17:20前後に迎えが集中するため、17:00頃では、多目的室でトランプや編み物、プレイルームでは追いかっこやごっこ遊び、畳コーナーでレゴ等の遊びを行う(図2-i)。職員は水回りの掃除や片付け、事務作業などを並行して行う。18:00前には全児童が帰宅し、職員は施設を施錠し帰宅し、その日の終日保育は終了する。2016年では、人数の増加による退所時の混雑をなくし、職員の負担を減少させるために児童は多目的室での静的遊び、主にビデオを見て迎えを待つという方針に変わった。17:00を過ぎると、児童は自分の荷物を取り多目的室に座り、主にビデオを見たり、読書をしたりして迎えを待つ。その間に職員は、事務作業をしながら迎えの対応・水回りの掃除・プレイルームの掃除機がけや片付けと役割を分け、円滑に作業を進める(図2-j、写真2-4)。18:00頃になると全児童が帰宅する。その後、職員は施設を施錠し帰宅し、その日の終日保育は終了する。17:00以降に関しては、混雑防止や職員の作業を並行して行うための合理化が図られており、人数の増加の影響が特に現れていると考えられる。

4. まとめ

以上より2013年梅雨期15人・2016年24~25人・28人の使われ方における典型的なシーンを抽出しまとめた。

雨天時における集団規模の違いにより生じる変化が、顕著に見られるのは、勉強時間と自由遊び、17:00以降児童が室内に戻ってくる際である。勉強時には、児童が個人個人でおやつ・勉強という流れを行うことや、職員が勉強後の児童の逃げの場の確保を考慮したうえでのプレイルームから優先に座らせるなど、プログラムを円滑に進行するための工夫に加え、職員の仕事の合理化も図った場面が見られた。自由遊びでは、晴天日に比べ屋外遊びのように広いスペースを有する場がないため大半の児童が室内で自由遊びを行う。その際に施設定員を上回る28人では、動的遊び間における干渉が多く発生し、グループ数の変化や継続時間を考慮すると28人には対応できていないと考えることができる。17:00以降では、退所時の混雑を避けるため、児童の管理のしやすさ、職員の仕事を並行して行えるようにするための合理化の工夫がなされていることが確認された。従って、勉強時・17:00以降に関しては晴天日同様に2室3領域の空間構成を利用した逃げ場確保の工夫により、円滑に進行できていることが確認できたが、終日保育において大半の時間を占める自由遊びにおいて、施設定員を上回ることに伴って起こる干渉の影響が顕著に見られることにより、雨天日放課後の終日保育においては施設定員を上回る28名の集団規模において十分に対応できておらず、施設定員は25人が正当であると言える。

謝辞

本研究を遂行するに当たり、下関市社会福祉協議会菊川支所、「つばめの家」施設長・職員及び児童保護者の方々の御理解と調査への全面的な協力を頂いた。末尾ながら記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 斎尾直子・長谷夏哉:都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心-豊かな空間確保両立についての考察,日本建築学会計画系論文集, No.614,pp,33-39,2007,4
- 2) 宮本文人・岩淵千恵子:学童保育施設における活動機能と平面構成,日本建築学会計画系論文集, No.618,pp,25-31,2007,8
- 3) 清水肇・小野尋子:学童保育施設の生活空間構成の実態,日本建築学会計画系論文集, No.668,pp,1799-1806,2011,10
- 4) 塚田由佳里・小伊藤亜希子:施設空間と保育方法からみた学童保育所の分割方法とその効果,日本建築学会技術報告集,第27号,pp,223-228,2008,6
- 5) 松本歩子・山根さおり・関川千尋:近年の学童保育所のあり方に関する研究,日本建築学会計画系論文集, No.630, pp.1683-1690,2008,8
- 6) 三宅勝司・高橋博久:民家型学童保育施設の空間構成に関する調査研究,日本建築士学会大会学術講演梗概集,E-1分冊,pp,59-60,1997,9
- 7) 江川紀美子・定行まり子:東京都心部の子育て関連施設の整備と計画に関する研究,日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1分冊, pp. 17-18, 2009, 8
- 8) 中園真人・大和聡羅他3名:学童保育施設における平日放課後の集団規模と使われ方の関係,日本建築学会計画系論文集, No. 723, pp. 1207-1215, 2016, 5

** 山口大学大学院理工学研究科 修士課程

** 山口大学大学院理工学研究科 修士課程

*** 山口大学大学院理工学研究科 助教・博士(工学)

**** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

** Under Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

** Under Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

*** Assistant Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng

**** Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng